

第 01 講 【 緒論・精気学説 】 教科書 P.1～7

【 緒論 】

[東洋医学概論]

とは東洋医学の基礎理論、東洋医学における人体・疾病の捉え方を学ぶ科目である。

[東洋医学とは何か?] * 教科書 p.1 より引用

“西洋”に対する“東洋”の意味には、中国のほか、インドなどアジア全体が含まれるが、ここでは中国大陸を中心として発展し発達した医学 (= 中国医学)を指している。
 また、中国から伝えられた医学（中医学）を漢方と呼んでいたが、最近では漢方という呼び方は、漢方薬（湯液療法）を指すようになっていたため、教科書では“東洋医学”を鍼灸・湯液・推拿・気功などを総称する意味で用いている。

1. 中国医学とは

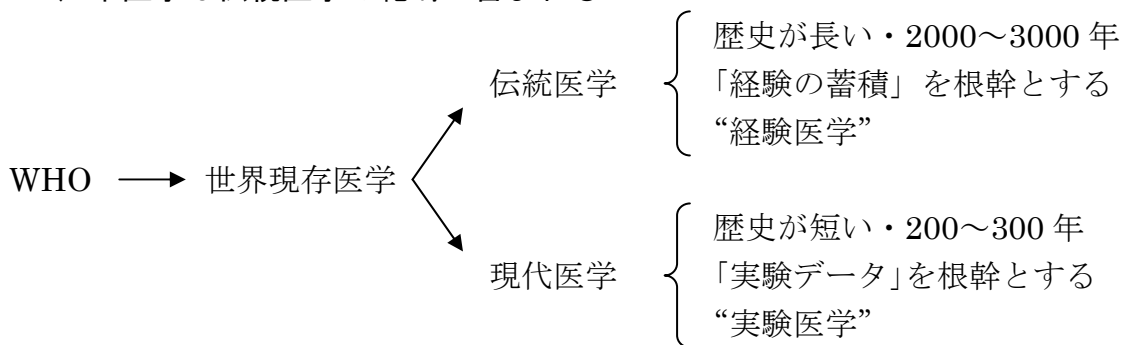
- ⎧ 広義：中国の伝統医学（各民族 = 漢民族・チベット族・モンゴル族）
- ⎩ 狭義：漢民族の伝統医学

* 研究対象：人体；活人・・・健康人+病人

* 研究内容：生理・病理・疾病の診断と防治

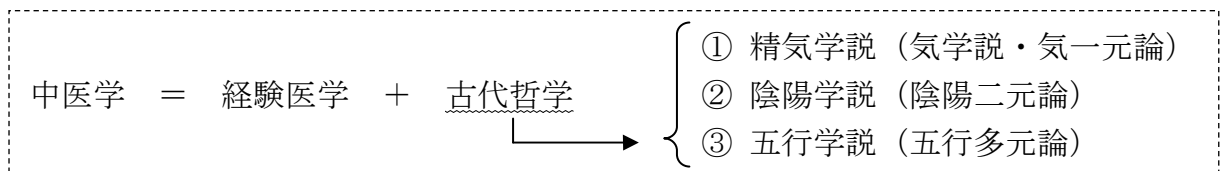
2. 中医学の基本特徴

1) 中医学は伝統医学の範疇に含まれる



2) 中医学は純粋な経験医学ではない

* 中医学は経験医学と古代哲学の結合体である。



3. 東洋医学理論体系とその成り立ち

1) 基礎理論体系

：春秋戦国時代(前 770～前 220 年頃)に形成される。重要文献－『黄帝内経』『難経』

* 『黄帝内経』: 『内経』とも呼ばれる。中国最古の医学書
『素問』と『靈枢』各九卷、八十一篇
計十八卷、百六十二篇よりなる。

* 『難経』: 『八十一難』『難経八十一難』とも呼ばれる。
著者は共に不明である。

- 主要内容 {
- ① 精気学説の継承 (道家哲学)
 - ② 陰陽五行学説の指導地位を確
 - ③ 「蔵象学説」の創立 (生理学に相当)
 - ④ 「病因病機理論」の創立 (病理学に相当)
 - ⑤ 診断学と治療学の基本原理の確立
 - ⑥ 養生学 (保健予防医学) の確立

2) 薬物学理論体系

：漢代(前 200～後 8 年頃)以前に形成される。重要文献－『神農本草経』

* 『神農本草経』: 『本草経』と呼ばれる。

作者－ 神農・・・不明？

全三巻に 365 種の薬物の記載

3) 臨床医学理論体系

：東漢末(220 年頃)に形成される。重要文献－『傷寒雑病論』

* 『傷寒雑病論』

作者－ 張仲景：“医聖”“方書の祖”と呼ばれる

『傷寒論』と『金匱要略・(雑病論)』の二部よりなる。

- 主要内容 {
- ① 弁証論治の創立
 - ② 六経病証による外感病の掌握
 - ③ 臟腑病症による内傷雑病の掌握
 - ④ 病因を 3 種類に分類

【 精気学説 】

：精気学説は東洋医学に影響を与えた最大の古代哲学であり、道家学説に属するものである。精気学説は精気(気)の概念を提唱しており、中医学は精気(気)の概念を人体に応用している。

1. 気の基本特徴

- ① 物質性：気とは実存する物質である。
- ② 運動性：気とは常に動き続けており、その運動には**規律性・法則性**がある。
- ③ 無形性：気には定まった形がなく、気体のように拡散した状態で存在する。
- ④ 微観性：気とは肉眼で見ることのできない微小物質である。

2. 精気学説の基本観点（唯物観）

- ① 世界の構成について：世界は気という最も基本的な物質により構成されている。
- ② 世界の本質について：世界の運動変化は全て気の運動による結果である。

3. 医学上での気の含意

- ① 気とは人体を構成する最基本物質である。
- ② 気とは人体生命活動を維持する最基本物質である。
- ③ 気とは大変強い活力を備えた、不断の運動を続ける一種の微小物質である。

要点 1：世界や人体は“気”と呼ばれる物質から構成されていて、世界のあらゆる事象変化や人体の働きなど全ての運動変化は“気”の運動の結果であるという考え方をするのが“精気学説”である。

要点 2：上記 1. 気の基本特徴にある 4 つの特徴「物質性」「運動性」「無形性」「微観性」それぞれの名称と定義は覚えなければいけない。

要点 3：上記 3. 医学上での気の含意の ③が一般的に用いられている気の定義なので必ず覚えなければいけない。（最重要）

* 要参照・・・教科書 p.3 2)－(2) 「気思想」による生理・病理観
p.7 1)－(1) 気思想